

校友會誌

第三十三號

大正三十三年二月

滋賀縣立彥根中學

目次

○大正十三年卒業生(第三拾六回)

口 繪

校 書

論 歌

文 苑

○寂しき一線に立ちて

○戦争と文化

○徹底的に

○志あらば事終に成る

○生涯苦楚脱れず

○成功の秘訣

○白星断片

○土に歸るもの

○いざさらは

○月かげの記

○其頃の事ごも

○四季の眺め

○夏の興

○蚊に悩んでの記

○怖しき思出

○二人の學生

○晩秋の夜の雲

○暖い陽

○日曜の一日

○眞の尊さ

○逝く秋

○初冬

○初冬を迎へて

○初冬を迎へて

○秋の朝

○冬が来た

○初冬を迎へて

○冬の朝

○Graduation Address

○紀行

○五年級旅行記

○白馬嶽登山記の一節

○四年級旅行記

三 甲 中 正 雄 男

三 甲 楠 好 三

三 甲 北 川 壽 平

三 乙 大 谷 伍 三

三 丙 三 浦 尙 孝

一 甲 居 長 英 三

一 甲 野 村 貞 三

一 甲 高 祖 佳 逸

一 乙 高 城 知 純

一 丙 中 村 誠 一

一 丙 中 村 榮 二

一 丙 中 村 榮 二

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

一 丙 漢 見 覺 了

目次

○富士登山記
○旅行記

詩藻

▲新体詩
○或裏町の出来事
○晩秋に
○夏の落日
○夏夜散策
○秋の斷章
○訪れて來たる春
○淡き悲しみ
○或船長のうたへる
○秋菫のつぶやき
○白星
○靜かな宵
○晩れ咲きの水仙
○雪の大伊吹の夕映
○古城の口吟
○角笛
○朝光
○泉
○秋の暮
○春の小川

三乙 松宮 誠一
三丙 木村 謙次

五甲 中川 治郎吉
五甲 中川 治郎吉
五乙 寺村 抱星

五乙 筒井 清彦

五丙 野瀬 光三

三甲 名畑 榮一
三甲 尾本 信三

○雪の野邊
○村里の曉
○西日落ちて
○狂犬

和歌

○百舌の聲
○心の反映
○折にふれて
○感傷の白星
○井伊直弼朝臣誕辰祭に列して
○落葉の集ひ
○雜吟
○雪の山
○寂しきの餘り
○懐しの西
○霜葉枯木
○時折の歌
○反古より
○紅葉
○雜草
○西日落ちたる時
○雪

三甲 北川 壽

五甲 中川 菊夫
五乙 寺村 抱星
五乙 渡邊 泰興
五乙 筒井 白星
五丙 野瀬 窓雪

三甲 名畑 榮一
三甲 尾本 儀三
三甲 藤野 壽豐
三甲 北川 誠一
三丙 松宮 謙次

五甲 中川 治郎吉
三甲 名畑 榮一
三甲 藤野 壽豐
三甲 北川 壽三
三丙 木村 謙次

漢詩通信

○上海だより
○國際ボート大會を見て

部報

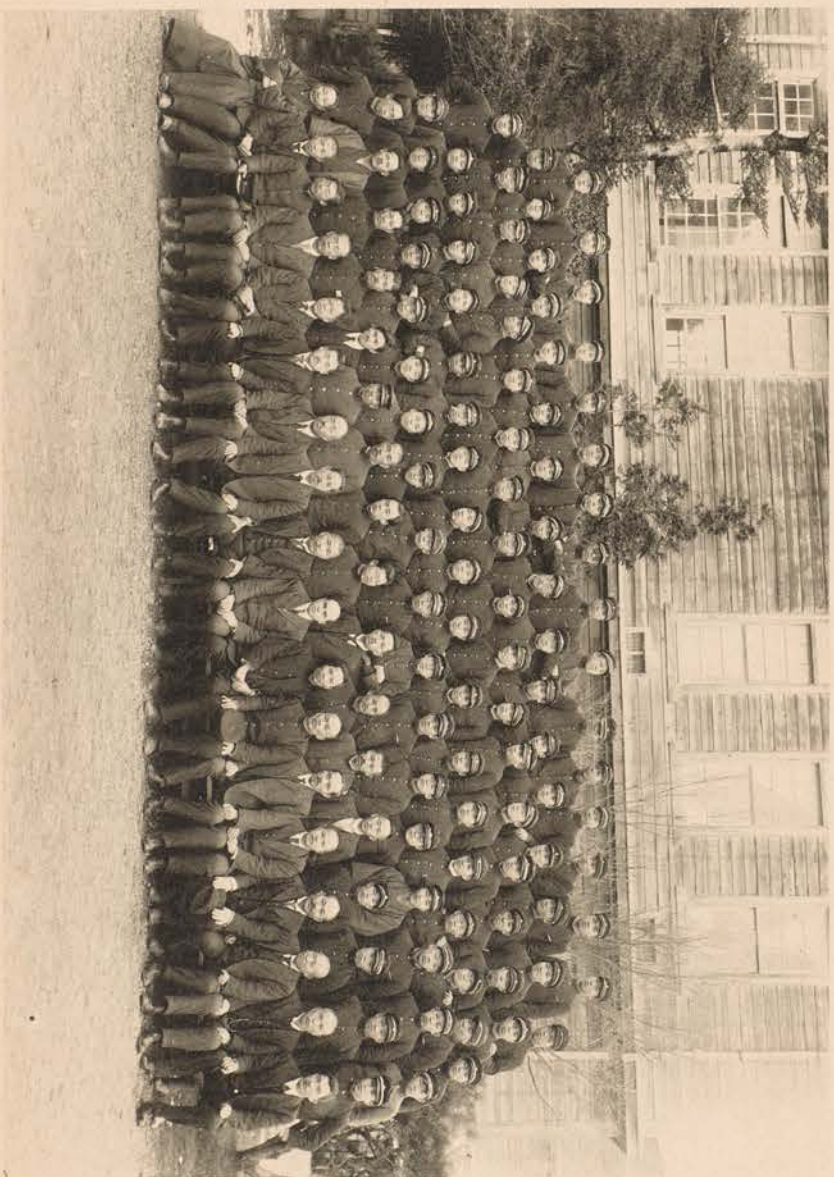
學藝部
武術部
端艇部
野球部
庭球部
徒歩部

雜錄

○學校日誌摘要
○會計清算書
○編輯を終らんとして

角田 瞻岳
三橋 勝彦
一 浪人

目次



大正十一年十一月十一日
詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基キ淵源ニ溯リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ昭示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誠ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ効果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕即位以來夙夜兢兢トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツチャ是レ實ニ上下協戮

振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實効ヲ舉クル
ニ在ルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ
浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシ
テ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ
博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テハ一己ノ利害ニ
偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ル
ヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾
臣民其レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

彦根中學校々歌

湖^{うみ}べの春^{はる}にかざられて
雲^{くも}ふきはらふ膽^い吹^ふ山^{やま}
ふもとの若^{わか}葉^はあたらし
われらが園^{その}はかどやけり
緑^{みどり}しづけき學^{まな}びやに
智^ち德^{とく}のどぼそ啓^{ひら}きつゝ
明^{あき}はなれゆく人^{ひと}の世^よの
われらが窓^{まど}に光^{ひかり}あり
不^ふ撓^{たふ}の決^{けつ}意^いと力^{りき}行^{かう}の
わかき生^い命^{めい}にまもられて
幸^{さい}どほまれに美^みはしく
われらが園^{その}はかどやけり

剛^{こう}健^{けん}自^じ助^{じょ}の門^{かど}によりて
湖^{うみ}畔^{はた}のまもり嚴^{おそ}かに
たてる金^{きん}龜^{かめ}の學^{まな}びやの
あはほまれある幾^{いく}春^{しゅん}秋^{きゅう}
金^{きん}剛^{かう}不^ふ壊^{かい}のこゝろもて
つとめ勤^こしむ森^{もり}のかげ
われらが窓^{まど}の燦^{さん}爛^{らん}と
あはほまれある幾^{いく}春^{しゅん}秋^{きゅう}
天^{てん}のかどやき地^ちに享^うけて
こゝろ澄^すみたる琵琶^{びわ}の湖^{うみ}
金^{きん}龜^{かめ}の春^{はる}とこしへに
われらが園^{その}は新^{あらた}なり

彦根中學校々歌

へ調四分ノ四拍子

1=96

5 5 1. 5 | 3 2 1 - | 5 1 2 3. 1 | 5 - - 0 |

ウミベノ ハルニ カザラレー テ
みどりし づけき まなびやー に
フダフノ サダト リツカウー ノ
がうけん じじの。 さによリー て

6 6 5. 5 | 4 4 2 - | 5 3. 2 1 2 | 3 - - 0 |

クモフキ ハラフ イブーキヤ マ
ちさくの さぼそ ひらーきつ つ
ワカキイ ノチニ マモーラレ テ
こはんの まもり おごーそかに

5 5 3. 7 | 1 2 5 - | 1 2 3 4. 3 | 2 - - 0 |

フモトノ ワカバ アタラシー ク
あけはな れゆく ひさのふー の
サチトホ マレニ ウルハシー ク
たてるこ んきの まなびやー の

5 5 3. 5 | 6 6 5 - | 1 2 3. 2 | 1 - - 0 |

ワレラガ ソノハ カガヤケリ
われらが まごに ひかりあり
ワレラガ ソノハ カガヤケリ
ああほま れある いくしゅん 秋

彦根中學校校友會誌

第參拾參號

論 說



寂しき一線に立ちて

四 丙 鹿 谷 義 雄

小寒い風の淋みしい音を立てゝゐる、林の彼方の山に夕日は姿を隠して、今丁度銀の茶瓶に水蒸氣を吹きかけた様な薄雲を淡紅色に染め出した。四邊には夕やみが一刻々々と忍び足に迫つて来る。今大なる自然は静かな暗に懷かれて、美しくしい夢を結ばんとしてゐる。

今日も私は一日を送つた。軽い安堵が私の胸に、ほのかな句を散らしてゐる。

「よく費やされた日が、楽しき眠を持つ……。」と、レオナルド、ダ、ヴィンは云つてゐる。

然し私は今日一日、善く費したであらうか？ 私は學校へ形式的に行つたのでは無からうか？ 私は惻愴の心を抱いたであらうか？ 眞實な事を云つてゐたであらうか？ 私の目ざしてゐる眞實な生活に副ふた一日を送つたであらうか？

此の小さい反省は私の心臓を針でつく様になんだ。私は總てを肯定するだけの勇氣に缺けてゐる。

私は憎を抱き、妬を感じ、媚びの眼尻をさげ虚偽の言葉を送つた。恐らくは今日の私の日記にすら、偽瞞的な綺辭を以つて曖昧化した事實を書き列ねるであらう。弱い私の心は夕ざりの鐘の音を聞くとき、やはり寂寞を以つて充たされずには居られない。

然し蕭條な私の心の隅にも唯一つ喜びを感じ得る事がある。

それは私は今日一日、無聊を感じなかつた事である。倦怠を抱かなかつた事である。私は此の事については、一つの幸福を感じ、感謝をさへげる事なしにはゐられない。

生の旅行に倦怠を感じてはならない。無聊を抱いてはならない。眞個に生活するものには、無聊も倦怠も無い筈である。美しい理想を凝視しながら、精進してゐる人々には、常に努力が與へられ、奮勵が授けられてゐる。焦燥に充ちた大地を踏みしめて行く、現實主義者には、醜惡な餘裕や、腐爛した休息は見出されない筈である。

無聊は邪に踏み込み、迷妄を彷徨してゐる人の苦惱である。

倦怠は不完全な肉體の行きづまりである。

永遠の過去より永却の未來に續いてゐる時間の前に見出された、私達の微細な相對的な運命に、どうして厭嫌があらう。

無邊廣汎な宇宙に立つて、眇たる五尺の身、轉施にして消え去る生命にどうして、倦怠や無聊を存在せしめてよからうか。

或懶惰者が野良に出て、一日中青く澄み切つた空を眺めて、薄暗くなつた時分に、只一つの詩を抱いて歸へつて來た。然し彼は、どうも黒い無聊も、汚れた倦怠も感じなかつた。

それは彼の心が、赤子の如く青空に親しみ、哲人の様に眞理を凝め、試人の様に淳朴であつたからである。暮れ行く夕方の田園は彼をして限りない愛着を起させた事であらう。

最も惡い囚人が、一日中驅使せられて、綿の様になつた身體を、冷え切つた獨房内の板の上に投げ出して、そこで彼の味はふものは、明日の幸福をこがる、夢ではなく、温かい涙に充ちた感謝ではない。惡感と嫌惡に充ちた無聊と、それに裏づけられた憎みや、背人道的な感想のみである。

獄屋に累世の身となつてゐる不幸な人々は、退屈の餘りに壁や天井の細菌の蕃殖にすら、興味をそゝられるのである。

私は無聊を感じる人々を憐に思はずには居られない。無聊を感じる人々は、人生を、それは嚴肅な人生を壊はして行く人である。「叛逆者よ」と私は呼びたくなる。その憐れな人は眞理を見失しなふ人か、そうでなくば人の見出した眞理を拾ひ集めるに、齟齬としてゐる人である。

私達は嚴肅な人生を辿りながら、永遠に神より與へられた仕事に従事しなければならない。

「神よ労働の値にて、あらゆる善き物を賣り給へ。」と眞劍に叫んだ、レオナルド、ダ・ヴィンチの言葉は眞實な生活を送る人々の切なる叫びではなからうか。

嚴肅な人生!!それは、眞劍な、素直な生活の底を、滾々と流れてゐる、靈泉である。

私達は、五十年の生を生存で始終してはならない。

生存は見苦しい闘争である。そこには、愛も信もない。汚ららしいパンの争闘のみが續けられてゐる、弱い者はいつも、反抗に燃えながら、自分の肉を捧げる事に忍従しなければならぬ。

生活の内に個性が流露してゐるのである。人格がここに崇高な色彩を表してゐる。道德が善を表現してゐる。藝術美が、美しい鳥の様に、飛翔してゐる、眞理が、絢爛の衣をぬいで彩光に包まれながら、露な嬌態を表してゐる。私はいつもこの眞實な生活を送りたいと思ふ。いつも努力したいと思ふ。生活にパンの闘争は許されぬ。パンの爲に人を殺し、弱い者の肉を搔取る様な、嫌惡な、醜惡な情景は此の境地に見出す事は出来ない。

「往生の爲に千人を殺せ。」と云つた親鸞の心境がこゝに表はれてゐる。

私達はパンの争鬭よりも、往生の爲に千人を殺す、大きい體驗を信の内に積まなければならない。孔子は子貢を諫めて、休息所を示してゐる。

「墓地へ行きなさい。其處には千古以來無數の人が息ふてゐる。然も永久の休息に浸つてゐる。」と云ふ様な意味の言葉であつたと思ふ。

そうだ、私達の人生は墓場へ行く様な静かさ、嚴肅さに充ちてゐるのである。

此の嚴肅な心地を以て歩み、戦ひ、熱愛したもののみが、久遠の堂宇に入つて不滅の休息を贏ち得るのである。

千人を殺したものが、親鸞の指さす淨土に往生する事が出来るのである。

死の刹那迄、道の爲に努力した人が孔子の教へた、永遠の休息をし得るのである。

解放された巷に出でて、寂しい一線を精進せんとする私も、大きい、試練を受けながら、苦しい體驗をしながらか歩んで行く。

一九二三、十一、廿二

戦争と文化

三甲 名 畑 榮 一

長い人類の歴史上に於て戦争は美しく飾られた地上を、同胞の血を以て汚した。さうして、此人類史上の恥づべき出来事が、往々偉大なる光榮の如く思はれてゐる。此迷信が時代々々に於て戦争をひきおこしてゐる。そして戦争は人類文化に貢獻するものである云ふ議論をこの世界に存在せしめる。戦争と文化との關係については、三種の見解が存する。戦争は文化の發達を促すものであると見る説が其の一であつて、これに

反する説即ち戦争は文化の發達を促したこともあつたであらうが併し平和であつたならばなほ一層文化の増進が速かであつたであらうと云ふのが其の二で、往昔世界交通の開けない時代に於ては、戦争が異民族との接觸の機會を與へ、それがために新しい文化が榮えたことがあつた。世界交通の開けた現代に於ては、その必要はなくなつた。それで過去に於ては戦争は文化の發達に貢獻したであらうが未來に於ては戦争は文化の發達に缺くべからざるものでないといふのが第三の見解である。

今こゝに問題となるのは文化とは何を意味するかと言ふことである。文化の定義に就ては、學者の間には種々の議論があらうが、文化價值とは眞・善・美等人類の究極目的に關するものの量である。その文化價值を増進させる機關としては哲學、科學、道德、藝術、等がある。戦争も間接に是等に貢獻することはあるであらうが、或目的のための手段である以上人類の究極目的に關しては何等の關係もないのである。戦時狀態に於て、軍需品の製造が發達し武器が進歩するのは當然である。併し武器は、戦争を以て始めて意義を有し平時に於ては、必要のないものである。武器は戦争の道具である。戦争は領土侵略、或は正當防衛の手段に用ふる道具である。

プロシヤ軍國主義に哲學的基礎を與へむとしたヘーゲルは、國家を神化せむとした。彼は社會と國家を區別し、「社會は多數個人が國家の利害のために規約を設くる團體であるが、國家は明かにこれと區別して考へなければならぬといふのである。かくて彼はルソーやホッブスの國家契約説に反對し、もし國家が多數個人の契約によつて成立しその目的が、個人の生存安寧幸福にありとすれば、個人が國家のために生命幸福そのものを犠牲にすることは全然無意義とならなければならない。個人が國家のためにその生命幸福を犠牲にするを辭せず、我々がこれに高き價值を認むるは、國家個人以上の高き目的を有し、その興亡は個人の生死以上の意義を有するからである」。かくてヘーゲルはその歴史哲學に於て、一の時代に於ける最強の國家は辯證法的の文化を代表する、或る國家が滅亡するはこれに反する文化を有する國家が代らざるべからざる

を意味する、歴史は過去の國家と未來の國家との闘争の連續である。汎論理主義の立場よりは國家、民族、軍隊の背後にはそれ等によつて代表さるゝ文化が論理的發展をなし、城砦や砲臺の背後には理念の戦争が行はるゝのであると説べてゐる。(完)

徹底的に

三甲 名 畑 榮 一

古今東西林檎は何百億も落ちた。然しそれを透して初めて宇宙の一大真理なる引力を發見したのはニュートンその人であつた。鐵瓶の湯のその蓋を動かした事もはかり知ることの出来ない程屢々あつただらう。面もその平凡な事を觀察して、その觀察を尊きものにしたのは彼のフルトンその人であつた。

地球は平凡なものと一般に信ぜられてゐた時、否、丸いと考へたのは學者であつた。がその學者等も只考へただけで死んで行つた。然しそれを實證に導いたのはコロンブス其の人であつた。「斯うだ」と考へて必ず「矢張事實だつた」とうなづくには大低ならぬ努力と苦心とが在る。努力と苦心とを缺いたものは何事も淺薄だ。「淺薄」は或意味に於て現代社會を説明し得たものだ。我々多くの生徒は、試験本位の勉強をしてゐる様だ。又或者は賞品の爲めの努力の様だ。それでは不可ない。すべて徹底的に！其處に初めて勉學の生命賞品の價值が認め得られる。あゝ紛然たる思想の混亂よ。實に今こそ危機一髪である。徹底的に危険思想を其の各々について叩き潰さねばならぬ。

「雨だれも石を穿つ」、「牛の歩みのよし遅くとも」實に名言である。すべて世の中の事は間歇的になされるものは、永續に肝銘せられたるものにとてまかなはぬ。赤裸々なる實證を有してゐる。家康は、「人の一生は」と肝銘して間歇的な秀吉より豪くなつた。子孫の榮ゆること、前者の三百年に對し、後者の二十年は餘りに

赤裸々なる實證でないだらうか。現實主義。刹那主義の安樂を追ふ、淺薄な主義に蝕まれて行く人々を見る一時的の淺薄に對して徹底は永遠のものだ。どうしても徹底的であらねばならぬ。穿鑿的でありたいものだ。ソクラテスの臨終の言葉が思ひ出される。あゝ徹底的に行はれたもの程美しく光をはなつものはないであらう。(完)

志あらば事終に成る

三甲 大 谷 義 雄

如何なるものも志あらば終に成功するのである。斯く言へば自分は或志を持つて居るが、何時迄たつても成功しないと云ふ人があらう。其の人は志は持つてゐるが、それを沈滞せしめ、其れが實現する様に努力しないのであらう。其の志の實現に努力するのは恰も急流を遡るが如く一寸努力を怠つたならば、前進することが出来ないのみか却つて後へ還るのである。それだから努力するには千辛萬苦を嘗めなければならぬ。さうして辛苦に堪へ得る忍耐力がなければならぬのである。

千辛萬苦に打ち勝つて、志の實現に努力しないで、唯成功のみ夢見た所で到底成就すべき理由が無いのである。決して棚から牡丹餅と云ふ様な調子にはゆかない。

世界的の英傑ナポレオンは苦闘して彼の險峻なるアルプスを越へて伊國へ入つた。小野道風は柳に飛びつく蛙を見て大いに感じ、我國三蹟の一とも云はれる様になつた。また塙保巳一は盲人でありながら、よく諸學の蘊奥を究め、終に和學講談所長となり、群書類從正編、續編合せて三千七十部といふ浩瀚なものを作つたのである。

斯の如き人々は非常な辛苦を嘗め自分の志を實現す可く努力したのである。而も道風は六十の老人、保己

一は盲人であつた。まして吾等春秋に富める、意氣激刺たる青年が、志を立て、それに向つて努力したならば終に成功することは少しの疑念もないのである。

生涯苦楚脱れず

三 甲 吉 田 諦 成

萬物苦境の道を通過せざるは無し。

知事、郡長、町村長、諸學校長及び諸會社長の其の職に對する苦辛苦役の大なるを知るべし。此等の諸長の下に日日七時間乃至八時間の勤務に服する官吏教職員人夫にも銘々の職務に對する苦楚あるは言をまたず。饅頭帽を被る田舎車夫、店頭で客を待遇する番頭、丁稚、小僧、富貴の家に身を奉ずる下男下女に至るまで苦境を経ずして一生涯を過す者一人も無し。中に悠長に遊ぶ學生生徒にも苦境なしとせず、凡そ生を此の地に求むる以上は苦境を免るを得ず。

貧者のみ必ずしも苦境を経るに限らず。

家富み、身貴く加ふるに威あり權ある人常に樂地にありて苦境に居る事なかるべしと考ふる者は其の誤の最も大なるものと云ふべし。

巨萬の富を藏せし安田善次郎氏も富者としての苦楚が彼の心頭より離れずして終に刺客の手に斃れたるなり。

昔印度に、孤々の聲をあげし時、右腕一手天を指し左腕一手地を指し、周行七歩にして四方を顧みて、天上天下唯我獨尊と唱へし釋迦牟尼佛も、樂地を去つて深山に入り自から貴者としての苦境の人と強いてなりしなり。生きては三軍の將として權威を世界に轟かし死しては國士と仰がれし乃木大將閣下も、果敢なく去

りし二愛子の無常に眼を注ぎては。

萬州黃土の山峰より吹き下す腥風を鼻にし、三三五五湖沼なす紅鮮の血、彈丸に命を奪はれて斃れし忠卒の尸屍に接しては、猛虎の威をも壓する程の大將閣下も遂に苦境の血涙を兩眼より落して最後に清い清い生涯を白刃の上に締められたり、大將閣下の辭世を心に浮かべては思はず涙を落したり。

うつし世を神さりましたし大君の

みあとしたひて我はゆくなり

嗚呼閣下は純なる忠孝の道に順じて清い苦境の爲めに五體を刺し、弔砲の響と共に鬼神も慟哭し天も泣く閣下の最後に至りしなり。

柱大なれば梁木も亦大にして其の柱の受くる力の大きなが如く、享樂夥多なれば享くる所の苦も又少なからず、「南面の樂」と云ふ語もあれど、君主と雖へども一國の平和、民の安穩のためには且暮御敬慮を勞し給ふべし、彌陀は十惡五逆の罪人を救はんと焦熱地獄の熱湯の中に身を投じ、八寒地獄の氷流に彷徨ひ、衆生罪人を求め、黃金樹林の林の中へ救ひあげ白鵲孔雀の轉づる楽しい音樂を黃色黃光、赤色赤光白色白光の花咲く蓮華の上で樂しましめようとする大慈大悲の本誓の彌陀如來すらかく苦しみを求め給ふなり。

賢明英才の君主帝王は夜深更にして床を取り、曉に起きて身を清水で清め、義を取り、慾を離し、寸刻の暇にも常に國家安穩を祈念し給ふなり、此れ聖人賢人と雖ども苦境ばかりは免がれ得ざるなり。智者才能衆に卓越したる人、所謂天才秀逸の士ならば苦を排して樂地を得ると思ふは未だ思慮の淺きが爲にして未だ感の到らざるの人なり、秀才には秀才の苦楚あるべし。運動家には運動家の苦境あり、例へば野球の道に深く造れる人も、勝利のみを得るに非ず、時として惨敗する事あるべし、敗れし時は即ち苦境を免れざるべし。柔道の道に於ては絶倫の士と唱稱された、我が校道場に順道制勝の四字を記せし甲南師範も敗北の何物たるかを知らざるに非らず、力士の覇權を得し常陸山も一生涯勝ち遂げたるに非らず、一勝あれば一敗あり。

勇武絶倫なれば苦悶を抜き、樂しみをかち得ると思ふは未だその思ふ事の至らざるなり。抑も吾等人間は生前に於て苦を敵として戰を續けると云ふ事を神々と契約して生を此の地に得たるなり。此れ過去未來現在の三世に出てし聖賢の士の歎息悽惻の言葉多き理に當るべし。

斯くの如く人間が苦境に出でて苦と戰ふは古今東西何處の國にあつても變ることなし。人心道德の腐敗惡化すればする程、自然の人生に對する苦境、即ち人間の悲劇の襲來は多かるべし。大古より中世、中世より現代の慘たる悲劇、扱て現代に於ても明治の御代よりも大正の御代即ち今日見る所の悲劇苦境は過去よりも大なりと云ふべし。

我が艦船を用ひて歐米諸國及び諸外國と通商を結びし以來、假屋沖上の潜水艇沈没の慘狀、此の慘たる帝國民の悲劇苦楚が幾度もありしが、朝に妻子の笑顔に送られ、下春に到れば和喜樂しく遠洋航海の話に一家團樂の時をまつて家門を去り、果敢なく海底の水藻と化した八十餘名の死苦や憐れむべし。神佛の加護とも思はるべき艦長池田氏の存命の苦しみや如何。

九月朔日の丁度朝露の消去つて日中の暑さを思ひし頃關東改造の大震災は此の世の八熱地獄か八寒地獄なりしか、亦又天神の怒より人間に對する復讐か、腐敗惡化せし人心に對する自然の制裁か？身には綾羅錦繡の衣服を纏ひし人々は辛うじて衣物を取る有様、住みし大厦高樓金光燦爛たる天の許さざる住家は一朝にしてバラツクに變り朝な夕な見合す親子の顔と顔との間には互に苦しみの太い視線を通はして居る。食ふには山海の珍品を味ひ自然すらも人工金力之を左右するかの如く榮華の夢を貪ぼりし京濱の民も忽ち變じて失意の深淵に沈んで救ひを求めて居る、此の様に衣服食糧家の三金まで天神に奪はれ、彼等は散りし榮華を夢にして苦海の底に彷徨つて悲鳴の聲を天空にただよはせて居る、身は警備の職に奉じながら大杉を殺した甘粕大尉も矢張苦と戰つて居る。

人生何處までも苦は身邊に對して免れ得ざるものにして而も人生の生命を全うする銘々の試金石なるべし

語に曰く

苦海の苦を喫せずば人上の人となり難し

吾等は生前に神と契約せし如く、人間として生を求めたる以上は苦と戰ひ而して苦境に打勝ち美しき生を迎ふるにあり。苦は味ふべし。苦を未だ味はざる者は眞に人間味を知らざる輩にして共に談するに足らず苦境を避けんとする人は向上の心なき人なり。進んで苦を求め而して苦を制して光明の彼岸に渡るべし。

憂き事のなほ此の上につもれかし
憂きを我が身の樂しみとせむ

(終り)

成功の秘訣

三甲 淺野 清

成功の秘訣とは世人は或は徳性とか立志を得るによつて成立したる如く言ふは格別有名なる所説に非ず秘訣とは一に個性を發揮するものにして實行は甚だ難なりとす、されば此を實行し個性を發揮するによりて初めて成功の半をなしとげたる者といふなり。

成功と云ふは必ず富貴となりて人より尊敬を受くるものに非ず、又伯爵、子爵とかの如き爵位を受くるにも非ず。されば成功は如何なるものを指すかと言へば夫は人々が其の面貌が異なる如くに人々の長所を一一異にせり、其の長所をば強固なる意志を以つて飽くまでも伸展し其の人格乃ち能力を發揮するを以て成功となすなり。一例を舉げて示すに文學者ならば自分の清き一身を文學に投じ其の學理の極を修め尙一步進みて自己の意志によりて獨特の研究し、發明をゆるがせにせず文學界に盡す所を得てこそ之れ文學者として云ふべし。他も亦然り。

個性能力の發揮が成功なりとせば成功の秘訣もおもむろに追想する事を得るならん。されば前にも論せし如く人の個性と云ふものは一異なるが故にいたすらに自己乃ち能力及才等をかへりみずして人のまねするが如きは餘りほむべき事に非ず。

されど自己の意志になへる長所を取るは甚だ可なり。今時より昔時までを顧みて見るに或は乃木將軍のまねどかいやナポレオンのまねをなせるあるもの幾人あるかを知らず、されど一人として第二の乃木、第二のナポレオンとなりたるものは耳にせざる所なり。

何人も趣味非らざるものなし。一例を野球にて論せんか。

上手なるものは何時やりてもみすなす事はまれなれども之に反して下手なるものせんか、みす多くして僥倖にて止め得らるれども實力はさらになし、されど下手なるものと言へどもいつまでも下手には非ず長き年月を犠牲として練習なせば必ず出來得るものなり。

古人も言へり。「精神一致何事か成らざらん」と。

長き年月を一事にそゝがば成功する事は甚だ確なり、此即ち成功の最大秘訣なり。

口にて言へばわけもなき事なれども、一生を一事にそゝがん事は甚だ難なり。之即ち初めに實行は難しと論せし所なり。

器用なるものは人のうらやむ所なれども、器用なきもの必ず成功せず、不器用なるものはかなしき如く思ふれども、不器用なるものが最大の努力をなさば實に力は偉大なるものにして必ず成功す。されば要する所は根氣の長短にありて器用、不器用は論ぜざる所なり。(完)



文苑

隨想

白星斷片

五年 筒井清彦

暖簾を押し分けて外に出た。はてつた頬を冷めたい風が黙つてなでゆく。「星だ!」

まだ暮れてしまはぬ大空を見上げた。大空の一部に星がある。何故か知らぬが星が懐しく思はれる。「秋の夜」の作文の宿題が出てから一週間になる。あの高い空に静かに私語く星を窓越しに見守りながら筆を取る事の好きな自分は毎夜々々星の出るのを待つてゐた。けれど毎晩雨が續いた。星は見られなかつた。作文は随つて書かなかつた。何故か知らぬがあの沈黙を天に續けてゐる星が懐しかつた。然し心よく明るく白い秋雨を恨む氣は起らなかつた。しめやかに咽ぶ雨の音

を唯一人聞いてゐる程物淋しいものはない。何故か知らぬが筆を取らなかつた。

軒燈のまばらなこの町外れの道を通る人は殆んどない。水溜りに赤い灯が寫つてゐる。「スー」と吹いて来る北風にその水溜りが赤い小波をうつ。風の冷さ、おぼろな中に淋しく光る星、皆秋の來たのをはつきりと思はせる。今買つた中版紙と原稿用紙を片手に持ちながら水菓子屋の前を通る。一人の四十ばかりの女の人が林檎を買つてゐた。青白い瓦斯燈の光に照らされて、きちんと列べられた赤い林檎、その美しい艶に秋の光が動いてゐる。大空の一部にまたたいてゐた星が、何だか消えて行く様な氣がして「不安と焦慮」とを一緒にした様な感じを抱きながら家に入つた。

窓を開けて星を見る。

あの宇宙の神祕を物語る様な星が、強い電燈の光に描き出された、城山の天主閣の上に嚴かに光を放つてゐる。その煌は心に沁んで来る。涯ない孤獨の想ひに光る星、その清らかな淋けさに溺れたい。運命の敗殘者が世を呪ふ様にそゝり立つ天主閣に秋の静寂が狂ふてゐる。天に泣くか彼の星、地に泣くか此の我。あ

あ、星よ、城よ。共に幾百年幾千年の歴史を語る。荒れはて、苦むす金龜城。俊傑が幻の名残りか。英雄の夢みし跡か。今只秋風の吹きさすむにまかされてあるこの廢墟。「それソロモンが榮耀も野邊の百合に及かざるを。」と歌ふた詩人の言葉が心に錐でゑぐられる様に泌み込んでくる。星よ。汝れは知らないか。

こ、湖に生立つた幾多の偉人が末路を。英雄の吹きすびた笛の響も、佳人がかきならした琴の音も今はない。唯荒みはてた白い片身と昔に變らぬ鴉の湖。あはれいづこぞ緋絨の鎧着て馬を陣頭に乗り進めた若武者。あはれいづこぞ、そを城頭に送つた美しの乙女。兩雄若き日に義の爲に鎬を削る。愛人の靈は、はかなくも自ら消えざる。思ひは残る「普門品」あゝ今はない。あるべき筈がない。古き傳へとして聞くばかりか。星よ。汝れも知らないのか。琵琶弾じたる盲目の詩人よ。星よ。汝れも知らないのか。

時はたゆまず流れる。昔ながらの琵琶の湖の國。一世の豪者は起り亡びて今跡形もない、英傑よ。覇者よ。いづこにてか、この汝れが興亡の跡を見るか。美しき人よ。綾羅まどふた佳人よ。玉露と消え語る人も今

はない。いづこにて、しのび泣いてゐるか。満つる心ない哀調の秋の夕に星と共に語り得る人は誰か。

靈魂の秋が來て、自然の玲瓏を、美しい涙は流れ、清らかな血はおどる、詩人は歌ふ。その詩人とは誰か。千草の陰に虫がすだく。その小さい、いたましい曲調に、この大きな暗い宇宙が戰慄してゐる。おゝ秋の虫よ、何故に泣く。冬の近づくを悲しんで泣くのか。亡びゆく汝れ自らの爲に泣くか。虫よ。誰に教はつたかその凋落の曲。悲しい世を思はせるその歌。力強い静寂の中に傳はつて行くこの小夜曲。おゝ何故に泣くか。

「いづこより來りいづこにか去る」。
「來る所を知らず行く所を知らず」。
「生を知らず何ぞ死を知らんや」。

あはれ迷ひ行く秋風の様な人生よ。

幼齡九歳神前に國警ローマを畢生の敵とするを、誓はしめられ、一念常に國警を報じ、古今の名將相に卓越した手腕と崇高不侵の大人格と、勇壯絶倫愛國無雙の大精神の所持者、かのハンニバルの無限の悽愴を含

む末路。ビレネーの俊嶺を越え、アルプスの難關を突破し、尙武のローマ人に對して、西班牙の土兵を以て

あたり、寡にして常に衆を挫いた今古東西に比類のない名將、慘敗の痛撃を受けたカルタゴを平治して行つた賢良の宰相、ハンニバルの生涯程人生の悲慘を人に強く思はせ、強く人の心を傷ましむるものはない。敵の槍鋒に貫れた弟の首級が己の陣前にあらはれたのを望んだ時「我今カルタゴの運命を知れり」。と嘆じた彼の人生。

劉備が三顧のこよない知遇に、我が身を捨て、草廬を出で、天下三分の計を書し、蜀漢國の礎を固め、成敗利鈍逆め料り難く、臣鞠躬盡力死して後己まんと期して、三軍を五丈原頭に進めた諸葛亮の末路。「出師未捷身先死」と涙多い詩人をして、痛悼亢慨せしめた彼孔明が人生。

史を讀んで東西この骨を切り、赤い生血を一滴々々しぼらるる様な悲壯の所に至つて、巻を捲ふて痛嘆しないものか幾人あるであらうか。

不可解それが總てではないだらうか。

何が爲に學ぶか。何が爲に赤く毒しい名利を求むるか

。何が爲め名を後世に残さんとするか。生よ。

死よ。

人生よ。

この謎知る人もなく知る由もない。奥知れぬ哲理の底にこの淺學な身は觸れることが出来ない。

天邊の白き星は唯一人默然として無言の中に、宇宙の眞理と秋の恨みを語つてゐる。

靜かに／＼降つて來る細雨の私語。恐ろしいまでの森の續くる沈黙を破つて震ひ來る鐘の音。さら／＼と木葉ならし行く風の音。時の様にせ／＼と水の流。冷たい狂はしい月の光。皆自分の心を寂寥に導くのである。その寂寥は自分は追ふ。自分の墓場まで彼は追ふて來るのであるか。逃れようとしても、後から追ふて來る蹄の響がする。常に自分の後を追ふのか。歌のない時心は寂寥に満つ。詩は心を慰めてくれる。青春の心は涙と祈りに満つ。荒み行く心を、靜かな安息な「生」につれて行つてくれるのは友である。復心の友であり鞭達してくる友である。心と心が溶け合ふて一つに歸る様な美しい暖い心の所持者である。その友に接してゐる時寂寥の灰黒色の姿は見られない。鳥は林の巢にねむり、狐は森の穴にねむる今頃自分の

心は何處に安樂してゐるのであらう。無味荒涼とした今のこの虚偽の生活の中に、自分の心は苦悶と闘ひ續けてゐるのではないだらうか。只生の爲に生を續けてゐるのではないだらうか。

細々と黒く延びた花梨の梢に、金剛石を散りばめた様に、數限りない星が光つてゐる。空が晴れたのだ。こぼれ落ちて來さうな満天無數の星。それは美の極致であり、恐怖の極點である。心の鎮靜である。多くの哲學者が靜かに默想に耽つてゐる。

泣くよ、鳴くよ。片足の蟋蟀が。獄舎につながられた罪人の嘆きの様に。

風がさつと吹き過ぎると椽先の青桐がハラ／＼と闇の中に散る。淋し色の銀白色の秋の淋しさはその死の沈靜と麗光の嘆美とに抱擁せられて、そのまゝ高潔な詩に溶けこんでしまふ。

若人よ。清き子よ。この汚れた世に清き子と生れたのを喜び、享樂もなく、慰藉もなく、唯、苦悶と苦悶とにて、過ぎ行く、自分の現實の生活を天に感謝するのである。

「人を相手にせず天を相手にせよ、さうして又人を相

手にせよ、天を相手にして己を盡し人を咎めず我が誠の足らざるを尋ねべし。」

「命もいらす名もいらす官位もいらぬ人は始末に困るものなりこの始末に困る人ならでは艱難を共にし國家の大事は成し得られぬなり。」

これ熱血と熱涙の大偉人西郷隆盛が遺訓である。偉風堂々人を壓するの中に親しみを感ずる彼の爲人。綿服に薄蕤草履の風采。しかも尙、その論世に入れられず、戦も亦利あらずして、故山に歸り笑を含んで死に去れる大南州翁が至理の教である。大丈夫の生涯はよろしく苦闘なるべしと信ずるのである。

北辰は寛い秋の夜空高く、自由と正義の光はそこに溢れ、若人に熱き血と熱き涙を催させる。

一九二三、十一月

土に歸へるもの

乙五 寺村抱星

「もう仕舞ひませんか」傍の畦を通つて行く野良歸りの誰彼の、いひかけて行く言葉を輕く聞き流しながら

ら、彼はサク／＼と稻を刈つていった。

熟れ切つて殆んど枯れた様になつた稻は、利鎌が觸れる毎に、サク／＼と心地よい音を立てて刈られていった。もう今日の最後だと思ふと急に精が出た。

秋も大分更けた頃だ。夕暮の底冷えのする風が一頻り彼の頬被りの間を通つて頬を襲つた。そしてその度に思ひ出した様に稻が、淋し相な音を立てた。

「オオ寒い」

彼は首をちちめて刈る手を止めて野良を見渡した。

この小さな盆地の周圍に、にじり寄つた様に高い連山が取巻いてゐる。その中に可成りの田がある。その隅に取残された様に彼の部落は靜かに息づいてゐるのだ。西の連山の空と接する際から上は今夕焼の名残を留めて、薄紫色の雲が濃い橙色の空の中に漂つてゐた。そして地上は最早霞が彼の身の近くまで押し寄せて來てゐた。併しながら東方に位する高山の赤や黄に一面にもみぢした雑木は、夕陽のたゆたひの光を浴びて、眞赤に明るく映えてゐた。

空は際限なく淡青色にひろがつて、それらの高山の頂に消えてゐた。そしてひつきりなしに夕鴉が、高く

鳴いて歸つてゆく音が無暗に、淋しさをそそつた。

「後のもん先になあれ、先のもん後になあれ」

部落の方からは子守等の無邪氣な、さざめきが遠い山間の溪水のせ、らぎの様に、聞えて來るのであつた。彼は暫らく少年時代の無邪氣さを思つた。それから都會へと走つた竹馬の友を思つた。

村の家々には、ほのかに灯がともされて、どの屋根からも薄紫の煙が可成り烈しい風に、吹き飛ばされて散つてはかなく、空に消えて行つた。野良には誰も見えなかつた。この小さな盆地の稻田は大部分刈り取られて仕舞つてゐるのが、堪らなく彼を淋しくした。後の方の山の端で、百舌鳥が薄闇の中をけたたましく鳴いた。

「さうして秋も聞けていくのだ。若人の心に悔恨と寂寥とを打ち込んで、期待してゐた秋は過ぎていくのだ。」

彼は妙にセンチメンタルになつた。

連山の彼方にある製絲工場の夕の汽笛が、薄ら寒い風に送られてさびしく一頻り耳に這入つた、後はたゞひっそりとした晩秋近い田は淋しさそのものの様であ

つた。

「もう誰も今頃まで野良などに、残つてゐる者は獨りも居らない」

「すべてがあの灯の元へと歸つてしまつたのだ」

かう思ふと彼は堪らない焦燥を感じた。他から見れば滑稽な程あはて氣味で、哇を急いで彼は歸つて行つた。

夕焼の殘光の反映は、今は、東の連山の頂の一局部だけに名残を留めて、それも麓から迫る夕闇の中に、次第に没して了つた。誰かが野の涯で人を呼んでゐる様だつたが、すぐに元の靜寂に返つた。

いつの間にか、例の貯水池の横手まで來た。もう日はトツブリ暮れて仕舞つて、家々の灯が入さやかに輝いて來た。池の周囲の土手には、天に向つて突つ立つてゐる枯薄が薄闇にも、しるく鳴つてゐた。そして其處では、秋の深さとそれにつれて人生の悲哀とを喚び起す様な、こほろぎの音が絶え／＼に聞えた。

彼はそこに立ちすくんでしまひ、つくづく西の空に眺め入つた。

「ああ、今、今日一日を照らしてゐた太陽が沈んで行

くのだ。あのキラ／＼と輝く偉大な太陽——すべての人間が絶對的の力の所有者だと考へてゐる太陽でさへも、何うすることも出来ない、或る大きな不可解の力の前には絶對的に服従否盲従して、みづめに引きづられて行くのだ——丁度人生の末路といった様な悲哀を胸に抱きながら——

「今部落の人々は皆何の驚異も恐怖もなく夜を迎へてゐる。彼等は全くこれらの事については無感覺で靜かに息づいてゐるのだ。」

「が誰が保証出來よう。あの太陽が再び明日も出て來てこの暗黒な闇がこれから先、永遠に續く様な心配はないと。」

「併し彼の太陽をあやつる者の力がこれから永久に否明朝だけでも、從來と同じ調子で以つて、繰り返し日輪を出すだらうか。この地上に住む全人類の中の一団誰が、明白に明日再び今まで通りに自然が運行して行くことを保証し得るか。」

「又、今夜限りかの不可解の偉力が、永遠に停滯してこの陰慘な夜が涯てしなく續く、と云つても誰が之に對して抗議を申し込むことが出來ようか。又誰が之を

杞憂だとして一笑に附して顧りみないでよからうか。恐らく誰もなし得ないだらう。

「是等は吾等にとつて堪えがたい心細い疑問ではなからうか。」

「部落の人達は唯過去の習慣からして、必然的に太陽は朝東に出るものと勝手に定めて置くのではなからうか。實際是のために、斯うして平靜に無感覺であり得るのだ。」

「このか弱い人間の力でどうして確實に豫言出來よう。彼等は恐らくこんな事は何も考へないで、日々の仕事に追はれてゐるのではなからうか。」

「彼等は明日なすべき多くの仕事を田に残して、歸つて行つた。そして自分もさうして歸つて行くのだ。」

「彼等の平靜は無感覺から來るのだ。彼等の無智が即ち幸福なのだ。」

彼はたまらなくなつて目を閉ぢた

「すべてが無だ。何が人間の力でなし得たか。又なし得るか。人間の力がどんなに大きいものなのだらうか。自然は偉大だ。それは到底言葉で表はせない。人間は丁度秋の風に吹きとばされて水の面に浮んだ櫻の病葉

の様な物ではなからうか。その葉にどうして水を動かすだけの力があらうか。」

「人間の世界はすべてが無だ。吾等が家をたてる。それも無だ。あの恐ろしい汽笛を吹き鳴らしてゐる、連山の彼方にある、吾等の憧憬の都會——そこには製絲場がある。瓦斯工場がある。——夜は赤々と赤い灯がついて不夜城の觀を呈する——その都會には人類のなし得るあらゆる物があり又人類の自然に對する反抗の證據が、飾られてあるが。それが絶對的のものだらうか。永久のものだらうか。この世界に於て人は笑つたり怒つたり愛したりしてゐるがそれが何だ。」

「唯あの空に輝く星。何かしら不可解の彼の蒼なるもの。それだけが永久的の近いものであり根底的に類似したものなのだ。」

「人間はたゞ自然の奴隸だ。實在に無慘にも引摺られていく沈黙の人形ではないか。この小さな世界にあつて、如何に大いに獅子吼したつて、その反響はどこまで傳はるのだらうか。返す／＼も人生は虚無だ。」

堪へ切れなくなつて彼の頭の中はガン／＼と熱く鳴り出した。

池の上を太古から吹きつづけてゐる風が淋しく小波を打たせて過ぎて行つた。またしても秋蟄が哀愁をそる様に鳴いた。

彼は自らを嘲笑した。あのさざめきの都會へ、憧憬の都會への心——それが早や無意味な事ではないか。行きつく所はあの光り輝く星ではないか。その星をあらゆる不可解の力ではないか。あの大空に於ける無限の愛に抱かれた時こそ絶對の安樂郷に入る時ではないか、すべてが無だ。而してすべてが一つだ。すべてが神に歸するのだ。

「友は皆都會へと走つた。榮譽へと走つたがそれが何になる。それはただ一度彼等がこの世から姿をかくした時、彼等の名をして一層淋しさを増さしめるに過ぎないではないか。

「都會へ出るのも好い榮譽を願ふのも亦嫌ふべきでない。併しそれが單なる憧憬より來てはいけない。輕るい野卑な目的の實現であつてはいけない。一日雜沓の巷にさわぎ盡しても、その間に絶えずかの蒼なるものを仰いで見なければならぬ。生活の底に自己といふものを確實に見なければならぬ。

「田舎に暮さう。そこであのホイットマンの様に日々の愛惜を歌つて生を果たさう。

「これが自分に與へられた唯一の天に同化し、宇宙と合一する道なのだ。そこに人生の價值がひそんでゐるのだ。

「ああ田園なる哉。土に生れたものは土に歸るべきだ。彼の胸は急に明るくなつた。そして闇の中を光明へと深く第一歩を踏みしめた。

彼はもう一度天を仰いで見た。

部落に入ると夜仕事の藁砧が早や聞えて來た。嘗つて彼はそれを忌はしい音としてきいた。今はしみじみと、好い音だと思つて心に描いて見た。

いざさらば

五丙 野瀬光三

この一片を同じ學舎に集ひし若き人々に捧ぐ。

陽春三月。

桃咲く春が五度廻つて、私の胸には卒業といふ喜びが溢れてくる。然しこうした若き人の心には満ち／＼

た喜びの中にも、尙一種の淡い悲哀が胸の或一部にびつたりとくつついてゐる様に思はれる。それは丁度五年昔の花咲く春であつた。なつかしい、田舎の村を離れた私の心は、初めて憶れてゐた校門を潜り、しばし得意の胸を躍らしてゐた。しかしこれからまだ名も知らぬ人々と長い間過さなければならぬ前途を考へて見ると、五年といふ月日は本當に長いたゞたしいものであつた。あゝ五年の月日よ。初めて父母の御手から放れた幼い心の淋しみが、幾度此の身を校舎の窓に依つて泣かしめただらう。

父の死、聞くだに私は涙の出るのを禁じ得ないので。過ぎつる方を思ひだして行くと私の目は終には涙が光つてゐるのです。

東の山端に輝く明星。黒澄む老杉の梢に上る月影。

それらはすべて私の心を狂はす程涙せしめたのでした。それが早や——思ひ返せば五年の昔——

けれども今かうして過去を思ひ出せど、只なつかしい春の宵夢の様でたゞうつら／＼と過して來たゞけである。果然私は此の夢から目覺めたのであつた。

例へば美しい緑萌ゆる若草に、春の柔い太陽を浴

びての轉寢からふと目覺れば今度は眼前に、社會と云ふまだ見た事もない、恐ろしい濁流が渦巻いてゐるではないか、私はおど／＼しながらそこを渡らなければ向うの岸に着けぬのである。成功と言ふ彼岸には種々の花が咲いてゐる。鳥の音も清々しう空を流れてくるけれど此の濁流よ。

目をつむつて棹す小舟がもしこの渦中にくる／＼捲き込まれたら最後、も早再び太陽の光りに浴する事が出來ぬに違ひない。この危険な場所が果して見事に渡れるだらうか、思へば不安が胸にせまるばかりである。五年前。私等は華かな希望を抱いて校門を潜つた。そして兎に角卒業の日が近づいて來た。又再び華やかな望を以て社會に押し出されるのである。

純白な、すなほな心の花を社會の穢れたすまじい荒風にあはしたくは無いが、自然の力には仕方が無い。いづれ散る花なら、もとの純白で散つて仕舞ひたい。今年甲子年であるさうだ!! 甲子だ!! 萬目一新の甲子だ!!

私等の前途を祝福してゐるやうな自然に私は感謝する。今金龜城山が紫に明けて、行く冬の朝暾が赤う高

い校舎を照してゐる。校庭の梅が眞盛りで淡い香りをうつとりした空氣に漂はして、冬枯の櫻もふくよかな若葉をふくんで、來る花を粧ふてゐるではないか、私等も來る初春を待つてきつと眞面目に活動せねばなるまい。

さらば、長き間よく導き給ひし師の君よ——同じ學び舎に集ひし若き友の人々よ——琵琶の湖畔、金龜の城下の教への庭よ——思出深き花散る校舎の窓よ。さらば別れん。いざさらば。

(來る春を待ちつゝ、一九二三、一一、二一夜)

月かげの記

五 兩 川 添 桂 藏

月は高く空の半ばにかゝれり。心の月もまた爽かにすみわたりぬ。さすがに忙しき街路も今は深く熟睡の底におちてそよこの風のおとづれに聞えず。耳をかたむくればそこしもなく歎喜の聲をあげて寂靜の大空を浪たせつゝ帝座はるかにのほりゆく鐘のひびきの聖なるかな。香りいみじき枝をかざして雲のかよひ

路ゆたかに天馳せ使、かゝる夕は、たちもやられず、蘭麝の神をや籲へしつゝあらん。仰げば榮光天地に溢ふれて平和と恩寵との我が世豊かに漲るを覺ゆ。

汀に立ちて眺むれば向ひはるばるうちわたす、其の湖水の浪の上に眞如の月かげばかり、知られぬ、太古の秘密を照らせる見ゆ。

自然は永遠に平和の姿相を現するに、わればかりは何故に限りなき哀愁にとざさるゝや。傷ましいかな、花に三春の香なく人に十年の麗なし。無常迅速の世のさま人の姿あはれいづこにか、恒常の貌を見むと、ひたすら心外に慰めを求めながら尙も進めば、昨日今日とも覺ゆるに、我が友のこの世を去りてより、はや三つ月は夢の間にすぎぬるかな。齡わずかに十六。逝く春と共にあへなく散りて、かゝるところに、さゝやかなる新墓の主とはなりぬ。

あゝ汝よ、その來ること遅くして、其の去ること何ぞ速かなりし。

げに頼りなき人の命にしてもあるかな。何をせましとて生れ出でたる我が身とも覺ぬ間に、無常の風の吹きくれば、秋の木の葉と散りゆくここの

痛ましき。まして現實の世の姿こそ、水に映れる花の面影にも似通ふらし。ありとし見えて掬びも敢へぬをいかにせんや。思ひて誰か胸を痛めざるものぞ。涙ぞせめての慰めなる。

まことや涙こそ憂愁の靜かなる聲なりけれ。淺ましき人の世に、こればかりぞ深き慰めなる。

秋の月は斷碑を照らしたれど、君は笑顔を以て、こゝに立つことなし。低徊すれども幽明とほく隔りては涼しき聲きくやすがもあらず。靜かに眼をこづれば紅の唇、秀麗なる、かんばせは、ありし世をそのまゝにたちまよふ心地す。あはれ清きものは脆く、いみじきものは、果敢なしとは誰がいひ初めけん。手向けし花には一掬の雫あり。香烟縷々として限りなき悲哀をかたる。あゝ汝よ。

今にして念すれば、往事茫として皆夢の如し。

夢か。この世にありしと思ひしこと夢か、ゆかりの人々を涙の谷に残しおきて芳魂とこしへに逝きたりと思ふこと夢か。

夢ならば覺めずもあれ、悲み、切なる思出こそせめては果敢なき慰めなれば。

入相告ぐる鐘の音のゆくへも知らず、消ゆゆくが如く、死の御手には現し世のあらゆるものも亡びゆきてたゞ形骸をこゝむるのみ。

一瞬の前われそこに居たり。一瞬の後汝とこしへにあらず。

あはれ靈はいづこの空にか翔りたらん。

抑々かの死とは何ぞや、また人生とは何ぞや。

人生とは何ぞや、ひじりは痛ましくも歎かれける。

我れこの世を何に譬へんや。

童子街に座し、その侶を呼びて、われ笛ふけども爾曹をどらず、哀しみをすれども爾曹胸うたすといふに似たりと。

さりながら人の世に反響なきを恨みとせず。獨り生きて獨り死す。夢と幻との中に反響も何の榮にぞ、心寂しければ、江山風月笑つて我れを迎へ、思ひ痛めば尊き美神は、あたゝかき、御胸に我れをかき懷かせ給ふ。我れは人の世の涙兒なれども、自然の寵兒なれば也。

ましてや人の助けによりて、食ひかつ飲むべしとはつゆ覺えず。獨立は人間生存の最も尊き權利なり。こ

れをしも失ふべくんばに生きて何らの榮えぞ。もし依頼すべしとせば、誰にか依頼せんとする。人にして人を頼るは、浮草が浮草に寄るといふばかりのたがひぞ。ましてや、偽り多き人心をや。

世にもし虚偽を知らざる人ありとせば、そは萬乗の帝冠を戴けるよりも幸ひ多き人なる哉。

人といふ文字は元來、哺乳動物の最も發達したるものの意義以上を有せず。心の活動は多少敏活に近しと言ひ得べし。そは比較的の語なれば也。

靈妙といふに至つては即ち大いに未だし。而して授けられたる、知識は偶々以つて虚偽を構成すべき利器たるにすぎざりき。偽りの世にしもあるかな。坦々として平凡なる順風に帆をあげて、來れる、貴き飽食の華公子輩は、芽出度しや、無爲の中に歡樂を現實視すれど耳ありて聽ゆるものは聞け。

張り裂くるばかりの胸の痛みを、わづかに咬みしむる袖にこらへて泣いて一夜を明かしたる貴きためしある人にあらざるよりは、未だ共に人生の真相を語るに足らざる也。

草の葉末に悲しき音す、虫の聲か、風のそよぎか、

其の頃のこころ

興 士 路

二月一日。午前八時から兎公を西山に狩り立てた。初回に追上つた時は、かなり大きな奴が二匹出たが、逃げて仕舞つた。但し此の大きな奴といふのは逃げたからで、釣り落とした魚の類である——實に惜しかった。併し俺さんも一年の時には、一匹ならまだしも二匹も逃がして上級生をやんやと云はせたんだもの然もあるべしだ。

あの佐和山の天險を下より攻め上る苦しさ。六回も追上つたが功なし。たゞ三度目に兎公何と思つたか自發的に網を目掛けてトンボがへりの藝當。今日の獲物はそれつきり。山を下りて人家に入ると、自己の無能を覆はんが爲に曰く、「七匹」だ。これ六匹プラス一匹は七匹にして、六匹は無匹に通ずればなり。午後三時山麓に引上げて其處で散解する。家にかへるや否や直ちに一枕を借りて、翌朝まで一氣に寝る、夕飯も忘れて。

三月十五日。姉歸阪す。米原に下駄を取りに行けど

我れをあはれとみそなはす心ある人の歎きか、心こゝに安からずば、いづこを尋ねてか安眠の床を求めむ。さらばとわれは徐ろに、袖を拂つて立ちあがりぬ。夜色沈々として葉末にすだく虫の聲哀れなり。丘を去らんとすれば菩提樹の下かげに撫子の花一輪いづらしくも露にしのぎて絶りぬ。

あゝ撫子の花か。

胸うちひきは俄かにやみ、われは石の如く凝然として立ち止まりぬ。忽ちにして天外に聲あり。

稍をわたりて萬里の曠野にたゞよひ去る。

あはれ薄命は悲しき聲をしぼりて泣く。

嗚呼逝きたるものには、平安あれ、來たらんとするものには榮光あれ。

我は大なる靈の力を信じ、限りなき、命を信じ、他力の救ひを信じ柔和にして謙遜なるものなれば、怒ることなくまた、逆ふことなし。

ちくちく見えて風にかつ散る露の身に光を添へて昇る眞如の月かけ、爽かにして今宵の空は殊更に澄み渡りぬ。されど此の月の光を硯に受けて書き流せる水莖のあとのみ我れながら覺束なきを。

の仰せ。澁面提げて急行。途中米原の町はづれの山を鮮人が數十名汗みごろになつて毀つて居る。毀れ取つた土をトロツコに満載して數丁もあらう、すつと向ふの海岸まで運んで居た。その時一の人若いのが突然俺の前でトロツコ諸共顛覆してトロと土の下に埋まつてしまつた。鮮人は皆馳せつけてすぐに堀り出した、が擦過傷を満身に受けてゐた。目の中からは赤い血がにじみでてゐた。痛いことであらう。若者は濕つばい土の上に堀りだされたまゝ動かなかつた。彼はうつむいた。やがて彼の目からは幾滴かの涙が赤い鮮血と交つて落ちるのであつた。そも彼の涙は何であらうか？痛みの涙が將た怨みの泪か？見よ眼前にこれを見て而かも我れ見るなりとしらばくれる監督人を。自分はしばしは同情の涙をそゝがざるを得なかつた。あゝ哀れなるかな亡國の民よ！！

三月十六日。切通りをのらくらと下りてくるとはからずも大阪の丁に出會ふ。朽ち果てて本像のみが空しく立つてゐる舊地藏堂のあたりに腰を下ろして友情を暖めた。彼は何時も乍ら我が庚申會の事には熱心だ。恐れ入る。十分ほどで互ひに健康と成功とを祈つて別

れた。

空を見れば今日は稀に見る上天氣。スツカリ拭はれたコバルトの空には暖かい柔らかな春の光が満ち充ちてゐる。あゝ春だ。春だ。もう試験もいやだ。俺の心は妙におどろ出した。

そんなことを考へながら山田村に入る。と又樺太に在るKに邂逅する。一体今日は何といふ日だらう？こゝ數年來東西南北。各々遠く離れて會はない竹馬の友に二人までも同日に、同所に、ゆくりなくめぐり合ふとは。

日頃鬱々とした僕の心も今日は珍らしく明るみへ出た。宮の華表の處の水落ちには澤山のモロコが静かに日向ボツコをしてゐた。

三月二十一日。休暇第二日の朝。七時起床。空は雲影なくコバルト色に澄み切つた好日和。八時頃まで裏の小屋の前にストールをだして陽春の光を身一杯に浴びた。可愛い小鳥が前なる丈の低いすらむめに頻りに鳴いてゐる。隣の雞が視子連れでうちの畠まで出稼ぎに来る。コココといふのが餌を教へてやるのかと思はれる。何時もなら一も二もなく追ふんだが。今

Hに限りそんな物質的欲念は少しも起らない。たゞ自然のまゝを眺めることが出来た。お女将さんが畠の隅でしやがんで動かない。卵を生むんだらう。主人公は朗かな聲をばり揚げて得意になつてゐる。

「あゝのぞかな光。とはに輝け。」

三月二十三日。相變らず七時半まで狸寝する。八時朝食。それから漢文をノートしやうと思つたが、他事のみ捗つて一向進まない。澤山まだ残つてゐる。

端書が舞ひ込んだこの母の言に飛んでゆく、Hからかど多少心のおどるのを感じながら、手にどつて裏を見る。どうしてか、どうしてか。Hはど

うしてゐるんだらう？
大分日脚も短くなつた。春の太陽は庭のまんざく桃などの若々しい芽を椽側の硝子障子にくつきりと映してゐる。

四月二日。晝までに畠仕事と薪割りをする。薪割は臍の緒切れて以來初めてだ。台にしておく木ばかりこつて肝腎の丸太は高飛るといふ有様。それでもやつと薪割りの秘訣といふものを會得し、氣合一發、思ひ切つて打ち込んだ。――まるで剣道の實習みたい

な事だ。――が、めつたに旨く割れない。端ばかり打

つので丸太がサ、ラの様になる。その中に手の平にボツ／＼と豆凸が出来る。中々六ヶ敷いものだ。午後はHへのレターを書きかけたが、余りのたよりなさにツヒ筆を擲ち、「人生とは何ぞや」など生意氣なことを考へる。やはり解らない。

五月三日。朝まだきよりひねもす今夜の演説會の原稿を手入した。六時風呂に入つて上品寺に行く。霧の様な雨が降つてゐる。ガラシとした御堂には、十燭光の電燈がたつた一つ、淋しい光を放つてゐる。Iがテールを出したり、色々と準備をしてゐる。まだ誰も来てゐない。半時間ほどすると皆が来た。しかしオージェエンスが来ない。俺はシト／＼降る暗に包まれた鐘樓に上つた。そしてジョンボリ南の空を眺めた雨の爲めに祭の夜も静かだ。唯だ遠く山の麓に赤い街燈が、螢の様だ。俺の心は寂しい。それにまだ新しいさみしみがこみあげてくる。Nは今頃何うしてゐるだらうか？ あゝさみしい晩だ!! 雨は大分止んだらしい。我に歸つて御堂に行くとやはり會員ばかりで、オージェエンスはたゞ二人だ。演説會も遂に失敗に終つ

た。

四季の眺め

三甲 名 畑 榮 一

野澤の氷のまだ解け切らぬ頃、早梅が蕾を破つて清らかな香を放つ。一雨ごとに草の葉や木の芽が目立つて伸び、陽が頬に温く感ぜられ初める。こゝに春の幕は開かれたので、丘や畑の土が柔かに脹らみ、しつとりと潤つて来て、土の中では土の中で、物の根が心ゆくばかり動きそめるのである。そこに土のいのちから香氣と共に幽かに吐き出される水分が、霞となつて静かに地球の面に漂ひをめて、而して風は日一日と暖かくなり、百花ざりざりの色彩を以て天地を飾る春霞に包まれて、ほんのりと見える遠山の姿、黄いろい菜の花に胡蝶の舞、青い空に雲雀の樂、さては草摘む少女子、かくして野も山も棚曳いた霞の屏風の中で櫻の裾模様のある緑の新衣裳にすつかり着換へてしまふ夕櫻の花あかりに夢多き明眸をあげる少女子の肩に一片二片散りかゝる花瓣も亦すくなからず風情がある。